

# 僧侶にして文化人・地域開発者 観専寺住職稲木黙雷

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

市内材木町に浄土真宗観専寺がある。第二十二代住職の稲木黙雷は、僧侶としての宗教活動のみならず、文人画家として、あるいは勤王思想家として多方面に活躍した人物である。ここでは黙雷の僧侶としての人ととなり知らしめた高久露崖の支援、および鬼怒川沿岸の新田開発について紹介したい。

稲木黙雷は、享和元（一八〇）年稲木山観専寺第二十一代彰願義彰の子として生まれる。名は環中、法名を願睿（義競）、黙雷は号である。黙雷が高久露崖（那須郡杉渡戸生出身、鹿沼で育つ、谷文晁の弟子、天保十四（一八四三）年没）を師と仰ぎ、時には支援者になった背景には、父彰願の影響があった。

彰願は書画を好み、文人画家高久露崖を寺坊に招き宿泊させるなど親交を深めた人である。一方、黙雷は父の勧めもあり二十歳の時、露崖の弟子になり文人画を学んだ。墨竹を得意とし、長じては鑑定に秀で、篆刻も得意とした。

露崖の支援者には、鹿沼や宇都宮の文化人たちがいたが、黙雷は、露



稲木黙雷「風竹図」



露崖山人之碑

崖の生前中の支援はもとより、没後も師徳を報じてやまず、露崖の年忌法要を怠ることはなかった。天保十四年、露崖が亡くなった際には、先師の遺影を描いて三年忌法要を勤めることを計画、制作を露崖の友椿椿山に依頼、稿本（下書き）・正本の二つを制作した。弘化三（一八四六）年、露崖三年忌法要には本堂に稿本・正本二つの遺影を掲げ法要が行われたという。また、露崖十三回忌法要の安政二（一八五五）年には、境内に露崖の彰徳碑建立を発願、菊池教中を通じて大橋訥庵に撰文を依頼した。諸般の事情により法要には間に合わなかったが、翌安政三年四月八日、露崖の命日に開眼供養された。観専寺本堂前にある「露崖山人之碑」がそれである。

鬼怒川沿岸の新田開発は、黙雷の盟友菊池教中が中心になって行ったものである。教中は宇都宮出の江戸の豪商佐野屋の経営者菊池淡雅の子である。幕末、経営を引き継いだ、江戸幕府の開国政策により真岡木綿等の販売が望めなくなるとして、資本の投下先を地元の鬼怒川沿岸の岡本、桑島両新田の開発に向けたのである。

新田開発には、直接田畑を耕す入植者がいなければならぬ。中心になったのは越中（富山県）、越後（新潟県）、加賀（石川県）、因習（鳥取県）からの浄土真宗門徒であった。この入植者の勧誘、受け入れを黙雷が行ったのである。黙雷は、若かりし頃、越中専立寺で修行したことがあり、そこで越中等で入植の呼びかけを行った。ところで江戸時代は、檀家制度があり、入植者は檀家として引き受けてくれる寺が必要であった。そこで黙雷は、真宗門徒の入植者を自分の寺の檀家として受け入れ、寺請けの問題を解決したのである。

入植希望者は、まず、観専寺に向いて黙雷の面接・指導を受け、次いで寺町の教中宅で承認を受けた。そして仮住居のできる間、観専寺に寝泊まりしながら新田に通ったのである。

僧侶や神主等の宗教者の在り方が取りざたされる昨今、黙雷のこうした活動は、大いに見直されてもいい。他者に対する活動こそが宗教者の本分と思うのである。